

さいたま市シニアユニバーシティ岩槻校第9期校友会会報第2号

9期校友会に思うこと

副会長 坂本〇〇



皆さんと巡り合えて早いもので5年が過ぎようとしています。今では気持ちも打ち解けて和気あいあいと楽しいひと時を過ごしているように思います。それ故に全体集会をはじめ諸行事の出席率の良さは、岩槻校のどの期の中でも他に類を見ないぐらいで、協議会の中でも「まとまっている」との評判をたびたび聞くようになりました。

これもひとえに、関谷会長の人柄の良さと統率力があればこそで、その上に役員をはじめ会員の皆様のご理解とご協力の賜物と思います。

平成29年度事業計画も整い、しかも出席率も良く、班活動も活発で大変喜ばしいことで、9期校友会は順調に活動しております。担当各位にはご苦勞をおかけいたしますが実行あるのみです。

もし皆さんにお願いするとすれば、9期生全員の参加を理想とする文化祭の演芸について、練習を含め積極的に参加する事を望んでおります。それには皆さんの「参加」と云う「心がけ」が必要と思われまふ。私的に言わせてもらえば、保険の標語ではありませんが「日掛け、月掛け、心掛け」です。そして、骨を折った方が「傘屋の小僧」（骨を折って叱られたり、馬鹿を見ること）にならないようにしなければなりません。この様なことを念頭において校友会活動に協力して頂ければと思います。

特に行動を起こしていただきたいのは、クラブ活動として「ハイキングクラブ」「花散策クラブ」の復活を強く望むものです。その他新しいクラブの創設を考えて頂ければ最高だと思います。とりとめもない話になりましたが、これまでの9期校友会活動を振り返り、これからの更なる発展を願って私の思うところを書いてみました。ご協力ありがとうございました

第1回 学習講演会

「熱血レフェリー・人生を語る」

第1回目は現役の日本ボクシングコミッション・レフェリーである吉田和敏氏を講師にお招きして、表題のテーマで講演会を開催。1時間半の熱のこもった氏の生きざまを140人と共に堪能した。さっそうとレフェリースタイルで登場。ユーモアを交え、中でパンチの繰り出し方を教授したり、挫けそうになった時に母親からの一言で目が覚めたことなどを息も切らさず語って下さった。ボクシングのことなど大半の方が関心が無い内容であったので、当初、人選に不安もあったが、終わってみれば女性の会員を含め、心を打たれた内容に称賛の言葉がアンケートに記されていた。全身汗にまみれて熱弁をふるわれた。

講師も、聴いた我々も満足なひと時であった。多くの方からの質問にも丁寧に答えて頂き、ボクシングにそれなりの理解が深まった。



第3回9期納涼寄席開催

澄川前会長の提案の寄席も3回目を迎えることができた。今回は初登場の鹿鳴家七夕さんが「短命」を熱演。他の3名人はおなじみの方々にそれぞれ得意の和芸で私どもを落語の世界に。ここあさんが練習不足の所為か幾度となく忘却の世界に入られたのも愛嬌で、それぞれ得意の演目で私どもを楽しませて下さった。



鹿鳴家さん好・・・「鈴ヶ森」 鹿鳴家七夕・・・「短命」 鹿鳴家酒郷・・・
「背なで老いて唐獅子牡丹」 鹿鳴家ここあ・・・「延陽伯」



名人芸 さん好さん



新人 七夕さん



おなじみ ここあさん



渋い 酒郷さん

国宝妻沼聖天山の彫刻美 史跡めぐりクラブ

9月21日(木)「妻沼聖天山の彫刻美鑑賞」のため、9時に大宮駅コンコース豆の木前に集合。参加者14名で、9時08分発(快速高崎行き)乗車、話が弾む間もなく熊谷駅に、バスにて妻沼聖天前で下車、雲一つない秋晴れのもと「聖天山貴惣門」をめぐり聖天山本殿前にてガイドさんを待った。



妻沼聖天様本殿



吉祥天・弁財天すごろく

本殿彫刻参観入場券にて、透塀(玉垣内)に入り各壁面を総て彫刻で装飾し、華麗な色彩が施されている。ガイドさんによる案内で、壁面の説明を聞き目で確かめながら一回り、絢爛豪華な装飾に目を奪われるようでした。平和の塔貴惣門をめぐりガイドさんは終了。お休み処で、「縁結びいなり」をほおばりました。休憩後、



縁結びいなり

井田記念館・坂田医院旧診療所・両宣塾跡石碑・大我井神社を経て妻沼聖天前へ時間調整の間、美味しそうなかき氷「抹茶あずき」を食べ、バスを待つ。熊谷駅から大宮駅まで普通列車で予定通りに到着。事故もなく有意義な一日を過ごすことができました。幹事の皆さん有難うございました。

岩槻連絡協議会 グラウンドゴルフ大会開催

9月28日前夜来の雨で開催が危ぶまれたが、午後から晴れるという予報で開催を決定。我が9期からは13名が参加。今回が初めてという参加者も大勢おられたが、上級者のアドバイスで大変スムーズに運び、無事前半の2ラウンドが終了。引き続き後半がスタートしたが急に天候が思わしくなく、雨も落ちてきたので急遽関谷実行委員長の判断で中止。参加者83名中、優勝は中澤さんでスコアは38、8位には蓮見さんが1打差の39で入賞。9期も大奮闘した。優勝者の中澤さんは「後半を戦っていたらどうなったか判らなかった。ラッキーだった」と謙虚に話しておられた。83歳に万歳を贈ります。



9/15 「東アジア激動の中で、転換するか日本の進路」

～”1強”崩壊か、継続か、21世紀の日本の選択～というテーマで時間を大幅に超過して熱弁をふるわれた。流石ジャーナリスト。見事に今回の総選挙10日告示・22日投開票を言い当てられたことには心底敬服。併せて「前原丸」の船出に暗雲がたちこまれたことにも言及。日本の将来の人口問題にも触れ、2050年の推定人口が1億を切り、2060年には8700万まで減少する事を予測。最後にドイツの哲学者ヘーゲルの言葉で締めくくった。「歴史から学ぶことができるただ一つのことは、人間は歴史から何も学ばないということだ」



安岡正篤記念館・川越散策 史跡めぐりクラブ

記念館職員により、安岡先生の生い立ちや、金鶏学院及び日本農士学校設立、東洋哲学に基づく農村青年の教育を行ったとの説明を受け、戦後、昭和24年には師友会を設立、政財界のリーダーの啓発・教化に努め、その精神的支柱となり、教えを請う政治家や経済人も多数に上ったとのこと、また、元号『平成』の考案者でもあります。武蔵嵐山駅から川越市駅へ

川越大師喜多院をめざし、川越祭り準備中の街をきよろきよろしながら喜多院到着。

喜多院を見学・五百羅漢を訪ねて慈恵堂前で記念撮影、いよいよ菓子屋横町を目指す、蔵造りの街並みのお土産屋さんや時の鐘を眺めて、菓子屋横町へそれぞれお土産を物色、満足して帰る準備、バスを待つ。暑さが心配でしたが、幸いにも曇りで直射日光も当たらず快適な散策日和で、女性教育会館内の昼食は美味しかったです。

大宮駅到着もほぼ時間通り、事故もなく有意義な一日でした。計画をされた、幹事の方にお礼を申し上げます、有難うございました。



ボウリング大会開催

10月17日第2回ボウリング大会を開催。雨天にも拘わらず今回は男女合わせて26名が参加。中には事前に班活で特訓を重ねたところがあり、男女とも其の練習の成果をいかんなく発揮した。男子の優勝は5班の前澤さん、準優勝は2班の町田さん。女子は2班の澄川さんと準優勝には熊倉さんが。班対抗は2班が他を寄せ付けずダントツ優勝。栄えあるブービー賞には最長老の牧野さんと、女性は濱野さん。終了後応援に駆けつけてくれた皆さんを交えて中華飯店で表彰式を兼ねて懇親の場を楽しんだ。会員から「毎年開催したい」との要望があり、来年も2班が担当で開催する事に決定。楽しみが増えた。



決まっていますね！誰？



昼食会

	男子	女子	班対抗
優勝	前澤 299	澄川 248	2班 788
準優勝	町田 272	熊倉 238	5班 673
第3位	瀧田 263	駒宮 224	4班 657



「インパクトのある内容の原稿」を依頼されましたが、いろいろ考え、私達の共通話題としての「老後の人生」について考えてみました。

私の家系は短命で、7人兄弟のうち4人が亡くなっています。父方の実家は従妹を含め全員が亡くなり本家は無くなりました。また、母親は61歳、スポーツマンで病気知らずの父親は76歳で亡くなっており、私は、最近めっきり体力が落ち、多くの持病（片頭痛・飛蚊症・痛風・低血圧・膵嚢胞・胆石・胃、十二指腸切除等々）があり、最近では肩痛に苦しめられており、父親の寿命を超えることはないと思っています。

今まで何回か「死」に直面したことがあります。その都度、家族や友人、同僚など周囲の方の助けにより今の私があると思います。そう考えると「おまけの人生」です。今までお世話になった方々をはじめ、これからは恩返しの人生です。私が喜びを感じる最大のことは、人から感謝されることです。「ありがとう。」と言われることが私の心の栄養です。

古希を大幅に超えた大先輩から見れば、「若いのに何を言っている！」とお叱りを受けそうですが、私も古希を過ぎました。「三十代は加速度的に年をとる」と言われたことがありましたが、現在も加速度が緩んでいません。

「お迎え」に対する恐怖感はありませんが、皆さんとの出会いを大切にして、感謝される人になれるよう頑張ります。そして、できれば、良かれ悪しかれ後世の家族、知人に少しは記憶に残る人生であることを望んでいます。イメージの暗い投稿で失礼しました。

埼玉に伝わる「ネロハー伝説」妖怪一つ目の団十郎

ここは武蔵の国、寒村であり裕福な村ではありませんでした。秋の収穫も終わり、年貢米も納め一息つく頃ですが、貧しい百姓ではそんな一息つく暇はありません。昼間は百姓の主食の芋堀で忙しく、礼春収穫する麦の種蒔き、燃料の薪割りなどで忙しく、霜の降る前にやらなければならない野良仕事も沢山ありました。

夜は、毎晩夜なべ仕事、米をとった後の藁で縄をなう、来春収穫する麦を入れるかカマスを編み、来年の秋収穫する米を入れる俵編み、寝る間を惜しんで働き続けました。

そんな貧しい百姓家に娘を嫁がした母親は娘が可哀そうで何とかしなければならぬと考えました。そこである夜、娘の嫁ぎ先へ「一つ目の妖怪」の格好をして、「ネロハー、ネロハー」と叫びながら（もう寝ろという意味）押しかけて行き、家の外にあった駒下駄で雨戸をドンドン叩きました。

たまたまその日が12月8日の晩でした。それ以来、師走八日は、ネロハーの日と言うようになりました。

その夜の噂が広まり、各家は、ネロハーが来て駒下駄で雨戸を叩かれないように、家の外へ於かなくなりました。また、家々では「もっとたくさんの目を持った妖怪がいるぞ」と、ミイケカゴ（目の粗いカゴ）を長い竿にかぶせ軒先に立てるようになりました。それが「今晚我が家では遅くまで夜なべをしてない」という目印になったそうです。

年寄りの茶飲み話では、9月、10月生まれが多いのはネロハーの所為だと言っていました。（県北方面に多く行われた行事で、昭和30年ごろを境に自然消滅しました）